
紅き戦士の凱旋

古林 暉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅き戦士の凱旋

【Nコード】

N5313E

【作者名】

古林 暉

【あらすじ】

十四世紀、ヨーロッパで広大な大地を前に百年戦争が繰り広げられていた。イングランド軍とフランス軍の求めるものは、シャルル四世の死によって空席となったフランス国王の王座である。戦闘が進むにつれてフランス軍は衰退し、イングランド軍が優勢になる。オルレアンが落ち敗退必須のフランス軍は、次々と撤退し始める。しかし突然謎の少女が現れ、戦闘に出して欲しいと言う。その少女のおかげでフランス軍は士気を取り戻し、オルレアンを奪還する。シャルル七世はさらなる出陣を要請するが、少女はある条件を掲示

する。シャルル七世はその条件を承諾し、少女は出陣するが…。終
わりなき戦闘の末、少女が手に入れるものは…？

プロローグ（前書き）

この作品は友達と共同制作です。と言っても私は文章だけで内容は友達が考えています。ですから物語がどう展開していくか分かりません。

私も書きながら読者と一緒に物語がどうなっていくか楽しもうと思います。

ブローグ

雷鳴が轟いた。

低く立ち込めた雷雲が昼の太陽を遮り、辺りを灰色に塗りつぶしている。時折閃く雷光に、丘の上の黒々とした二つの群衆が照らし出された。突如、静まったのを見計らって一人の騎兵が丘の上から角笛を響かせた。その音は薄暗い丘に異様に響き渡った。それに呼び掛ける様に、雨風に紛れて二つの群衆が騒めきだした。

「ロイド様！開戦の角笛が鳴らされました。ご命令を！」

「聞け！運命の笛は鳴らされた。我々の明暗を分ける戦だ！狼狽えるな！」

ロイド王子は馬に跨がり、槍を掲げた。

「血統高きロイドの名、ここで終わらせはせん！ガリア軍の真の力を見せつけてやれ！」

王子の言葉にさっきまで狼狽えていた兵士達の士気が上がった。

「うおー！！！」

「王子の前に生ける敵は存在せぬ！」

ロイドは槍を高く掲げた。

「兵力は五分！後は一人一人の力量だ！医療班を残して私に続け！」

王子は馬で駆け出し、兵士達は叫びながらそれに続いた。

「進め！進め！」

敵軍も突っ込んでくるのが見えた。王子は構わず馬を走らせた。そして敵軍との戦闘に入った。

「私の邪魔をするな！狙うは大将首！雑魚は退け！」

ロイドは鬼神の如き勢いで敵を薙ぎ払っていった。王子の槍は敵の鎧を貫いた。

「ロイド王子だ！奴を倒せば我が軍の勝利だ！全力で潰せ！」

「そうはさせん！王子を御守りしろ！」

しかし雨のせいで視界が悪く、双方とも手当たり次第に敵の兵士

を斬っていくのに切り替わっていった。もう大将狙いも戦術も無い、乱戦、いや殺し合いである。敵を斬ったと思えば斬られと一進一退でしばらくつばぜり合いが続いた。いつしか辺りを夕闇が包み込んでいた。

「ええい…、これでは疲弊するばかりだ…」

ロイドは最初の勢いも無くなり、複数の兵士に足止めされていた。振り下ろされたサーベルと呼ばれる洋刀をロイドは槍で弾いた。そして出来た隙を素早く突き、槍で敵を貫いた。

「う、流石はロイド…」

敵が王子の気迫に圧倒され、たじろいていると敵を率いていたと思われる人物が突っ込んできた。

「退け！退け！ロイドを仕留めるのはこの俺だ！」

そいつは王子の前にいた兵士を、敵味方関係なく軽々と斬り捨てた。「こいつ、両手剣を片手で…」

ロイドの言葉通り、人一人分あるかと思われる大きさの剣を、軽々と振り回していた。

「それでも王子か？ロイドの名が泣くぜ！」

敵は剣をロイドに向けた。

「うっ、こいつは私がやる。お前達は私の戦いを邪魔する者を斬れ！」

「はっ、承知しました！」

兵達はたじろいていた敵兵を斬りにかかった。王子の敵は剣を振り上げ、思いきり斬りにかかった。ロイドは槍で防ぐ体勢のまま、間一髪で脇へ避けた。避けられたかと思われたが槍は真っ二つになっていた。

「うっ…」

「いい切れ味だ。獣の血が騒ぐぜ…」

ロイドは槍を捨て、腰の短剣に手をかけた。

「この乱戦をあんな槍一本で戦い抜くつもりだったのか？笑わせる」「あんまり喋ると舌を噛むぞ！」

ロイドは敵に突っ走っていった。

「抜刀せずに突っ込んでくるとは、愚か者が！」

敵は剣を横に構え王子を迎え撃つ。

「うおお！」

ロイドは敵が剣を振り下ろすよりも早く抜刀し、ロイドは敵が剣を振り下ろすよりも早く抜刀し、腹から胸にかけてを斬り上げた。

「ぐわぁ！」

敵は剣を落とし、片膝をついた。切り口からの出血と吐血とでロイドは返り血を浴びた。

「やってくれたな王子。でもまだ終わっちゃいねえぜ」

敵は剣を拾い再び体勢を整えた。ロイドも後ろへ下がり体勢を立て直した。

「まだくたばらんとは…、お前は人間か！」双方が走り出し、いよいよ剣が交わるかと思った時だった。何処からか矢が飛んできて、ロイドの右胸を貫いた。王子は前のめりに倒れた。敵は突然のことに啞然としている。

「……………」

「うつ…、誰がやった！」

敵は周りを見渡すがこの雨と乱戦で誰が放った矢か分かるはずもなかった。

「……………だがここは、戦場だ。ここでは死だけが存在するのだ。さらば王子」

小声でそう呟き、振り返って大声で兵に命じた。「王子は死んだ！後はもはや烏合の衆に過ぎん！一氣に畳み掛ける！」

敵兵達の士氣は一氣に上がり、逆に王子を失った軍は突然の事に成す術が無かった。王子の代わりに、臨時の指揮官が撤退を命じた。だが敵はまだ攻め続ける。そして次第に戦場は紅く染まり、雨は小雨に変わっていった。

王子の死に場所は静まり返り、雷鳴だけが寂しく鳴り響いていた。その一筋の光はまるで王子を天へと導く印のようだった。

第一章 オルレ안의包囲

ロイドの死から数百年が経った。もはや世を去った王子のなど、記憶する者は誰もいなくなつた。

そして時はいくつもの通過点を通り、途切れる事無く無限の旅路を進み続ける。幼いヘンリー六世とシャルル七世の対立の時代。これもまた一つ通過点であつた。

百年戦争の真つ直中、イングランド軍は次々都市を占領し、フランス軍はロワール川以南へ追いやられていた。トロワ条約により、ヘンリー五世はフランスのかつてのイギリス領を奪回し、シャルル六世の娘を妻にしてイギリスとフランス両国の王となつていた。しかしシャルル六世の息子、シャルル七世はトロワ条約を無視してフランス王を名乗り、反イングランド勢力との同盟を結んで戦を始めた。しかし戦況はフランス側にとって好ましいものではなかつた。十月、イングランド軍はオルレアンに攻め込み、周囲に砦を築いて街を包囲した。包囲は冬を過ぎても続いていった。

三月の肌寒さが残る曇天の空の下、しばしば吹く風がより寒さを増さしていた。オルレ안의街の前を流れるロワール川の北岸を守るため、イングランド軍は砦の建設にオルレアン市民に従事させていた。砦はオルレアンと橋によつて結ばれている。中でもトゥール砦はひと際大きく、いくつものカノン砲が顔を出している。その灰色をした要塞は、天にすらもその存在を刻み付けていた。

一方オルレ안의街中では、市民が駆り出されたために静まり返り、まさに静寂といった言葉がよく似合っている。そこへ馬を駆ける音が刻々と迫つて来た。イングランド軍の中尉アランとその部下である。もちろん上官であるアランが先頭に立っていた。二人は將軍に呼び出され、町の中心部へと向かつていた。あちこちに矢や砲弾の残骸が残る街角を曲がると、白い大きな建物が目の前に現れた。その建物だけは破損が少なく話し合いにはもつてこいであつた。二

人は馬を降りると建物の中へ入って行った。

中は見違えるほど手入れが行き届き、白塗りの壁は窓から射し込んだ日の光と見事に調和している。しかし上段に置かれたオルレアンの領主が座る椅子には、イングランド軍の総司令官、ポール將軍が腰掛けていた。

「中尉、今の状態を王のところへ報告に行つて来て欲しい」

「承知しました」「すでに包囲砦も完成しつつある。ここを物資調達の拠点として、次はブルジュを攻めようと思う」

アランは將軍に近づいて言った。

「しかし逃がした防衛軍が南岸に潜伏しています。攻め時を間違えますと奪還されます」

「分かつておる。こつちにも作戦がある。それに大将の階級は伊達ではない」

ポールは自信満々の表情だが、中尉は不安を覚えていた。

日が傾き辺りが暗くなってきた。ロワール川の南岸に逃げたオルレアン防衛軍は、成す術もなくテントに引っ込んでいた。防衛軍の隊長であるレイモンド中佐は頭を抱えて、そばにいる兵長と話していた。

「これだけの残存兵では奪還は無理です。援軍は来ないのですか」

「そうは言つてもな。どの都市も似たようなもんさ。自分らで手一杯だろうな」

「くそ！どうにもならないのか！」

兵長は悔しそうに、握りしめた拳を地面に叩き付けた。

「まあ今は変に動かん事だ。そうすれば良い知恵が回るかも知れんし、その内に援軍が来るかも知れん」

レイモンドは横になり自分の腕を枕にして眠った。兵長はランプの火を消してからその場を去った。

次の日の朝、一人の騎兵が馬に股がり駆けて来た。そしてまっすぐにレイモンド中佐のところへ向かって行った。見張りの兵に呼ばれた中佐がテントから出ると、騎兵は馬を降りて息を切らしていた。よほど飛ばしてきたと見え、馬も肩で息をしている。

「で、伝令！デュノワ將軍率いる数千ものフランス軍勢と少女が数日後に到着する見込みです！」

疲れと上官を目の前にしての緊張のせいか騎兵はたどたどしく言った。だが意味は十分伝わったようで、二人に希望の笑みがこぼれた。「これでイングランドの奴らに一泡吹かしてやれる！ところでその少女というのは……」

「はい、詳細は分かりませんが、王も信用しておられます」

中佐には胡散臭い、いやただ正体が分からない人物の話を聞いて、軍人特有の疑り深さが表情に出ている。

「そうか。とりあえず兵長らにその事を伝えよう」

それだけ言うと、中佐はふと空を見上げた。

昨日から続く曇天の空から一つ、二つ光が漏れていた。防衛軍の絶望の空にも、まだ光はあるのだろうか。光芒の中を横切る鳥の姿を見て、中佐の表情は和らいだ。

第二章 予言された王

どこからか吹いて来た花信風に春を感じる早春の朝方、シノン城の城門を六人の従者と白馬に乗った少女が通り抜けた。シノン城は台地の高い位置にあり、美しく装飾された協会堂、回廊、一区画の司祭の住居など随分な規模の城であった。その城の美しさと言ったら六人の従者も目を奪われるほどだった。

いよいよ城内へと入ろうかというところで少女は白馬から降りた。それを見ると衛兵は扉を開け、少女の一行を城の奥へ導いた。一行はいくつもの長い回廊を通って謁見の間へと進んだ。

「この扉の向こうにシャルル王太子が居られる。粗相のないように」衛兵が美しく装飾された扉を開けると、奥の玉座に腰掛けている人物が見えた。どうやらシャルル王太子であろう。磨かれた大理石の上に紅い絨毯が敷かれ、家来達は絨毯の端の方に並んで粗末な椅子に座っている。一行は絨毯を進んで玉座の前まで来ると跪いた。

「私、ジャンヌ・ダルクは王太子様に重大な事を申し上げるために参りました」

シャルルはジャンヌの要件を見透かしたように言った。

「私にオルレアンへ兵を出せと言いに来たのか」

「いいえ、私はシャルル王太子に申し上げるために参りました」

シャルルは少し驚いた表情を浮かべた。周りの家来達も少し騒つき出した。

「私がシャルル王太子だ」

「いいえ、あなたはシャルル王太子であられない」

ジャンヌはそう言うと、右手のシャルルに一番近い席に座っている家来に近付いて跪き、その家来の手を取り接吻をした。どうやらその家来が本物のシャルル王太子のようである。玉座に座る男は、小細工が見破られた事に少なからず驚いた表情をしていた。そしてジャンヌは顔をシャルルの耳元に近付けると、次のように耳打ちし

た。

「私はあなたの王家に伝わる家宝を知っています。それを守り通すことはあなたの力では出来ません。それと…」

突如ジャンヌは立ち上がり、シャルルの方に向かって皆にも聞こえるように予言した。

「冬が終わるとき、オルレアンの包囲は解かれ、あなたはランスにて戴冠されるでしょう。私に協力して下さい！オルレアンへ今すぐ兵を出すのです！」

言い終えるとジャンヌは、一礼して扉へと紅い絨毯の上を歩み出した。呆氣にとられていた衛兵も瞬時に反応し、ゆつくりと扉を開く。従者達もそれに続き、一行は早歩きでその場を去った。

シャルルは黙ってジャンヌを見送り、扉が閉まる音でふいに我に返った。ややあって家来達は予言のことについて議論を始めた。ジャンヌを試すためにした小細工のことはすっかり忘れている。

「あの女どこまで…。いや、だからこそ信じられるのか？」

「何かおっしゃいましたか？」

「いや、何でもない。これは話し合って解決できる事でない。とりあえず予言のことについては置いておこう」

翌日ジャンヌは、王太子の計らいでポアチエへ出発する事になった。その道中は問題無かったが、到着後に難題が待っていた。

「ジャンヌ・ダルクのご一行様ですか？」

いきなり三人の髭面の男達が現れ、ジャンヌに問いかけた。礼儀正しい清楚な格好から一般人では無かるう。

「そうです、何か御用ですか？」

「申し遅れました。私たちは審問委員会です。あなたを疑っている司祭様から審理せよと命じられた訳ですよ」

「そついう事ですか。では行きましょう」

「話が早くて助かります。では聖堂へ参りましょう」

審問委員会による審理は数週間にも及んだが、その甲斐あつて結果は朗報だった。

「彼女にはいかなる悪意もなく、忠実さと善心が認められました。この事態を考慮すれば、彼女をオルレアンへ送り出すのが妥当でしょう」

「ご苦労。では將軍に伝えよう」
「うむ」

ジャンヌは審理の結果を聞き、デュノワ將軍のいる兵舎のほうへ向かった。そこには数えきれないほどの兵士がいた。ジャンヌはデュノワの名を叫びながら軍勢をかき分けていく。迷い込んだ女に騒つく兵士達を一喝して、彼女に男が近付いてきた。

「私がこの軍を統轄しているデュノワだ」

「私がジョヌ・ダルクです。よろしく願います」

「ちょうど君の事を聞いたところだ。期待を裏切らないよう奮闘してくれたまえ」

ジャンヌは答える代わりに一枚の紙を差し出した。デュノワはその紙を読んで妙に納得した表情をした。

「すぐに出陣の準備をする。君も準備を怠らないように」
「分かりました」

そしていよいよ出陣の朝。蒼天にはのんびり雲が流れているが、遙か彼方には雨雲が待ち構えていた。

「どうも妙な天気だ。あの暗雲が私達の行く末でなかったらいいが……」

「そんなはずありませんよ、將軍。ところであちらの方は？」

「レイ中佐だ」

二人の会話に気付いたのか、中佐がゆつくりと近づいて来た。

「ジル・ド・レイです。どうぞよろしく」

「こちらこそ」

数千の軍勢の方に向いて、三人は手を取りあつた。

「何としてもオルレアンを取り戻すのだ！」

將軍のかけ声には、不可能を可能にできるのではないかと思わせる不思議な響きがあつた。それはデュノワの將軍としての力量か？それともジャンヌの見えざる力だろうか？

いずれにせよ、負けて帰る道はもはやない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5313e/>

紅き戦士の凱旋

2010年10月9日15時10分発行